

「注文の多い料理店」の教材研究の提案 —文学作品世界を深く体験したことを言葉にする場を創造するために—

秋田大学 高橋茉由

1. はじめに

文学作品の世界に漂う。この感覚をもちながら、文学作品の世界に参加する。国語（科）教育の場で。私は改めて、文学作品の世界に漂い体験することが大事だと考えていると、言いたい。

西郷竹彦は、体験を通じた理解の大事さを実感・体感していた人物だっただろう。西郷竹彦（1964）は「母のなかの“女”—わたしの文学開眼—」において、幼い頃、継母からまじないのような営みを体験することを通して、その事象の真意を理解できたと語っている。また、継母は、感情豊かで体でぶつかってくる人だったと語っている。そのような西郷竹彦の生い立ちが関連しているのだろう。西郷竹彦の一連の研究の核にはイメージすること、つまり体験した時に自身に生まれるイメージがある。

誤解を恐れず言うと、田中実も深い体験を通して文学作品を読んでいるのだと私は理解している。田中実から語られる言葉は、核心に迫る言葉ほど、よくわからない。それは、田中実自身が言葉にならない場所まで深く潜り体験しているからだだろう。また、語り手を含む作品世界に生きている人物一人一人への深い尊敬と理解を、田中実の読みから感じられ、私は自身のイメージが喚起される。田中実が叙述から遙か遠いところまで創造して読んでいくことができるのは、田中実自身がまるごと作品世界に参加し、濃く深い体験をしているからだだろうと想像する。

私の研究は、文学体験（虚構的体験）が核にある。「補足資料」に記しているように、国語（科）教育の授業で扱う理論にするために、西郷竹彦と田中実の考えをつなげて新たに構築したものが基盤となっている。

2. 発表者の立場ならびに発表内容の構成

教材研究とは、教育者自身の価値観および教育観が大きく反映されるものであり、また、授業をどうするかまで含んだ考えであると発表者は捉えている。したがって本発表では、まず、「はじめに」において発表者の価値観および教育観の一端を述べた。「3」以降では、「注文の多い料理店」の教材理解を述べた後に、単元構想の提案を行う。

「注文の多い料理店」の教材理解では、『第三項理論が拓く文学研究／文学教育 小学校』（2023年、明治図書）に書かれてある「注文の多い料理店」の「作品研究」と「授業構想」の内容を基にして、発表者が考えたことを提示する。上記の論考を基にするのは、本研究集会に参加される多くの方にとってよく読まれている本であるだろうことから、共通理解を図りやすいと考えたからである。発表者の考えは、これまでの自身の研究を踏まえている。考えに至った背景がわかりやすくなるように、「補足資料」において、発表者のこれまでの研究の全体像を示している。

3. 「注文の多い料理店」の教材理解

深く読むことの流れは主に2つあると考える。1つ目は、「構造・内容」を捉えることである。これは

別の言い方だと、「表層のストーリー」を読むことである。作品世界に参加して広く体験することであるとも言える。2つ目は、創造して読むことである。これは、叙述を基にしながら、作品の背景を読者自身で補い創造して読むことである。深く体験することであるとも言える。田中実の読みの提示の仕方も、上記のような流れになっているのは、深く読むためにはこのような情報のつなげかたをしていく必要があるからだとも考える。以下では、これら2つの読み方に合わせて、教材理解の内容を提示する。

3-1. 作品世界に参加して広く体験する

(1) 〈虚構の人物〉と文学体験

〈語り手〉が外から語ったり、視点人物に寄り添ったり・重なったりしながら、〈聴者〉に語っている。「注文の多い料理店」では、最初は、〈語り手〉が〈登場人物〉である「二人の若い紳士」に寄り添ったり重なったりして語っている。したがって、〈読者〉も基本的には「二人の若い紳士」と同じような体験を行う。その後、「二人の若い紳士」がおかしなことに気付いたところで、〈語り手〉は「すると戸の中では、こそこそこんなことをいっています」と語り、「山猫たち」に寄り添い重なる。〈読者〉は、「二人の若い紳士」と同じように、おかしなことに気付いた後に、「山猫たち」側から「山猫たち」と同じように体験することで、「山猫たち」が「二人の若い紳士」を食べようとしていた気持ちや見え方を体験する。

上記で述べているのは、〈語り手〉の語っている状況と、初読段階の基本的な〈読者〉の文学体験を説明している。発表者は西郷文芸学の「相変移論」を基礎としているので、〈語り手〉が「寄り添ったり重なったりして」〈聴者〉に語るというように説明している。詳しくは、「補足資料」の【図2】を参照されたい。また、〈読者〉が生活や学習の場で再読する際には、結末を知っていることから、初読とは異なる読み方（例えば、おかしなことを要求されているのに、「二人の若い紳士」は気付かないという描写に注目して読む。など）を行うことが想定される。そのため、再読では設置された視点を外して読むことが行われる場合もあると考えられる¹。

〈読者〉の文学体験は、体験を背負って重ねていく体験だ、と捉える。つまり、〈読者〉は自身の経験や価値観を背負ったまま、〈語り手〉の語りを通して〈登場人物〉の立場に立ち、他の〈登場人物〉の立場に立つ場合は、その前の体験を背負った状態で立場に立つと考える。「注文の多い料理店」の場合は、「山猫たち」の立場に立った際に、「二人の若い紳士」の立場に立った時に体験したことを背負っているため、「二人の若い紳士」を間抜けや愚か、食べることが出来そうで嬉しいなどと感じると共に、食べられそうで怖い、この後どうなるのだろうか、という「二人の若い紳士」側の感情や体験も持っている。以上の抱く感情は一例であり、抱く感情や考えの内実は〈読者〉ごとに異なるが、〈読者〉はこのように体験を背負っていくことで、複雑な体験をしているのだと捉える。

(2) 教材研究として

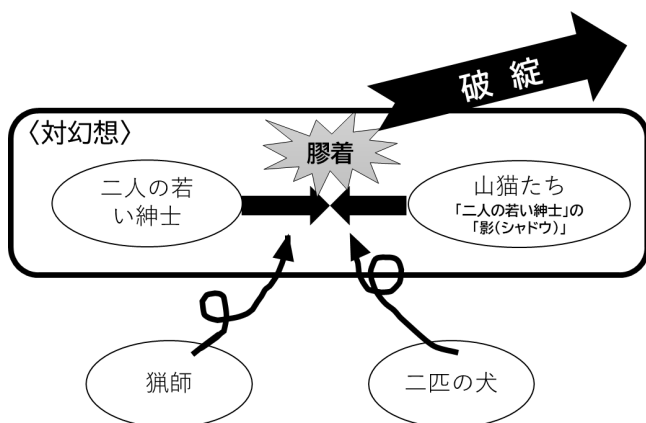
(1) で述べたように、〈虚構の人物〉（視点人物、対象人物、語り手など）は誰か。どのような話の流

¹ 小学校教諭の経験、授業実践を踏まえると、学習者によっては、初読の時点で設置された視点とはことなる〈登場人物〉に注目して、立場に立って読んでいる文学体験を営むことがある。それは、学習者が持っている経験や価値観等の個性が異なるからであると考えられる。詳しくは、「補足資料」の【図4】を参照されたい。

れになっているか。それに合わせて、〈読者〉はどのような文学体験を営むか。というようなことを捉えることが、教材研究の上では、まず必要になると考える。学習者が目の前にいる場合は、どの登場人物に寄り添いやすいか。(学習者独自の文学体験を想定する)ということを考えることも、大切である。

3-2. 深く体験する

(1) 「影(シャドウ)」と出会う空間



【図1】「注文の多い料理店」における「影(シャドウ)」との出会いと破綻

と述べる。

以上の田中実の読みの内実を、発表者が図式化したのが、【図1】である。「二人の若い紳士」と山猫たち(二人の若い紳士の影)が膠着状態になった際に、その関係が破綻する。関係が破綻すると同時に、外部の者である「二匹の犬」や「猟師」が入る。破綻したから入ることが出来るとも言えるし、外部の者が入ることができる状態だから破綻しているとも言える。関連し合っている。

田中実が以上の読みを営む過程を整理すると次の過程があると考えられる。

- ① 山猫たちを「二人の若い紳士」の「影(シャドウ)」だと捉える。
- ② 「二人の若い紳士」と山猫たちが出会う場を「対幻想」だと捉え、「猟師」や「白熊のような犬」が生きている世界とは異なる世界だと分ける。

まず、①についてである。どのようにして田中実は、山猫たちを「二人の若い紳士」の「影(シャドウ)」だと捉えることができたのか。それは、「二人の若い紳士」の立場だけでなく山猫たちの立場にも立って、想像しているからだと考えられる。「注文の多い料理店」は、田中実も説明しているように、物語の最初から食べられることに気付く寸前まで、「二人の若い紳士」の視点で描かれてある。したがって、読者は「二人の若い紳士」の立場に立って、「二人の若い紳士」と同じような体験をしながら「山猫軒」に入って戸をくぐっていく。山猫たちに食べられることに「二人の若い紳士」が気づいた際に、視点が山猫たちに移っていることで、読者にも山猫たちの思惑が理解される。このように視点の移り変わりに合わせた体験を、読者もしていくことで、基本的には、「二人の若い紳士」と同じように山猫たちに騙され、食べられる恐怖を感じる体験を行うと同時に、「二人の若い紳士」のことを間抜けだと感じる。

西郷竹彦(1988)の授業実践では、子どもたちが最後に「二人の若い紳士」のことを愚かだと批判する

ことを生かして、批判する以前は自分たちも同じように山猫たちの罠に気付かずに騙されていたことに気付かせ、その原因を考えることで、自己を批判・対象化するという「典型をめざす」授業を行っている。

以上の西郷竹彦の実践と異なるのは、田中実が山猫たちの立場に「しっかりと」立っていることである。「しっかりと」という表現をしたのは、作品の視点の構造とは別に、物語の初めから山猫たちの立場に立つ体験を営んでいると思われるからである。これは渡邊皆仁(2019)が指摘するように、田中実の読み方は、それぞれの人物の立場から捉えられる世界を想像・創造した上で、統合する読みを営んでいるからであると考えられる。

山猫たちの立場に物語の最初から立って、想像することで、山猫たちも「二人の若い紳士」と同じように、欲望のままに行動していること。その一連の心ならびに欲望の動きが、「二人の若い紳士」と瓜二つであることを感じ取ることができる。だから田中実が、山猫たちが「二人の若い紳士」の「影(シャドウ)」だと捉えたのである。

このような読み方は、他の読者にも見られるものである。発表者が大学の授業で「注文の多い料理店」を扱った際にも、「二人の若い紳士」と山猫たちは同じような人物だと感じている感想が見られた。しかしながら、田中実が「影(シャドウ)」だと表現している。ここは後に説明するように、この「注文の多い料理店」を深く体験する重要な点である。

次に、②についてである。どのようにして田中実が、「二人の若い紳士」と山猫たちがいる「だいの山奥」の場所を「対幻想」の場と定め、「猟師」「白熊のような犬」がいる世界と分けることができたのか。

「注文の多い料理店」を扱った際によく生まれる疑問は、「なぜ死んだはずの二匹の犬が生き返っているのか」というものである。そのような問いに対して、田中実(2023)は「それはここが最初から山猫たちと彼らに見透かされていた「二人の若い紳士」の双方によって作り出された「対幻想」の虚構空間だったからです」(p.174)と説明する。「双方によって作り出された「対幻想」の虚構空間」と述べているところから、両者の人物の認識が作り出した世界だと、田中実は考えていると想定される。このように田中実が考えられるのは、作品世界の人物それぞれから捉える世界が異なっていると考えているからである。²

したがって、「注文の多い料理店」の世界は、それぞれの登場人物によって、見えている世界が異なっていると考えることが出来る。「二人の若い紳士」からは、美味しい食べ物にありつける世界として。山猫たちも同様である。「猟師」や「白熊のような犬」からは、急に「二人の若い紳士」がいなくなってきた世界として捉えられているのでないだろうか。このように考えると、「白熊のような犬」が死んだのは、「二人の若い紳士」から捉えた世界での話であり、実際には死んでいないであろうし、むしろ「猟師」や「白熊のような犬」からしたら「二人の若い紳士」が急にどこかに行ってしまった、という出来事として映っているのである、と想像される。

では、なぜ「二人の若い紳士」からは「白熊のような犬」が死ぬ出来事が起こるのか。それは、「二人

² 田中実(2018)は、家の図によって、登場人物の世界が異なって存在していることを説明している。また、田中実(1997)では、認識した時点で「わたしのなかの他者」であると語ることから、同じ事象を捉えたとしても、捉える人物によって対象は〈自己化〉され内側に生まれる、つまり異なって捉えられることが説明されている。

の若い紳士」が、自らの意識が及ばないさらに深いところへと進んでいったからである。³

(2) 「影 (シャドウ)」との分裂が意味すること

同じように「影 (シャドウ)」と出会う作品がある。『影との戦い: ゲド戦記1』(清水真砂子訳, 岩波書店) (以下、『ゲド戦記1』) である。『ゲド戦記1』では主人公(視点人物)の「ゲド」が、「影」を自身の邪な心によりこの世に導いてしまい、「影」と闘う。河合隼雄(2013)が考察しているように、『ゲド戦記I』に登場する「影」は、「ゲド」の写し鏡である⁴。田中実が述べる「二人の若い紳士」の「影(シャドウ)」と、「ゲド」の「影」は同じ関係性であると考えられる。ここで興味深いのは、『ゲド戦記1』において、「ゲド」とゲドの「影」は、最後には統合することである。「ゲド」は自身の「影」を受け入れ、影と共に生きていくことを決意し、自身の身体に影を引き入れ、一緒になるのである。これによって、「ゲド」が成熟する姿が描かれているのであるが、「注文の多い料理店」では全く異なる結末になっている。

「注文の多い料理店」では、『ゲド戦記1』のようにその人とその人の「影(シャドウ)」が統合せずに、破綻し分裂する様子を描く。この描写は、他の賢治作品にも見られる⁵。なぜ、統合しない様子が描かれているのか。ここには、何の意味があるのだろうか。

上記の疑問のヒントとなるのが、田中実が「無意識領域のその外部に出会う」ことについて語っている部分である。田中実(2023)は、「Ⅲ 深層の物語の始まり」において「二人の若い紳士」の「自我や自己」が「解体せざるを得」ない中、「それでも二人は生きていかなければならぬ」とし、生きることへと向かう過程を、語り手は語っていると説明する(p.177)。生きることへと向かう過程を整理すると、以下の4つの段階があると考えられる。(pp.177-178に説明されていることを発表者が整理した)

- ア. 生き物の生と死(死と生)が存在している
- イ. 日々、無条件に「生」側にいる「二人の紳士」が、「死」側を体感・体得する
- ウ. 無意識領域のその外部に出会う
- エ. 紙くずのようなくしゃくしゃの顔のまま救い上げられる

「エ」に関して田中実(2023)は、「救い上げられた途端、己のなしてきたことを罪業として受け止めることができ、罪業と共にある生の尊さが燦然と輝くのです」(p.178)と語る。

上記を踏まえると、先述した影との分裂は、分裂後の自己と向き合い続ける過程へと導く意味があるの

³ なぜ意識が及ばないさらに深いところへと進むことになるのか、まではわからない。そこを考える必要はないと発表者は考える。「二人の若い紳士」にとって、偶然であるとともに必然によってそこへ突き進むことになったのである。

⁴ ここで河合隼雄が写し鏡という言葉を使っているわけではないが、「影とはただ無意識の全体なのだ」というユングの言葉を用いていることや、登場人物同士の間人性が同じであることを説明していること、発表者本人が『ゲド戦記I』を読んだ体験を踏まえて、そのように説明した。

⁵ 例えば、『猫の事務所』、『よだかの星』など。急いで補足すると、作品によっては統合しているように描いているものもあると思われる。しかし、破綻しているという感覚は受ける。この点については詳細に読む必要がある。

ではないだろうか。この思想は、先述した『ゲド戦記1』で描かれている思想とは異なる。異なるが、これもまた生き続ける道しるべを示しているものであると、感じられる⁶。

(3) 複数の文学体験が重なる構造

先に発表者は、「注文の多い料理店」の世界は、それぞれの登場人物によって、見えている世界が異なっていると考えることが出来ると述べた。このことは、須貝千里(2023)の論考からも考えることが出来る。須貝千里は、「注文の多い料理店」の授業構想において、「不思議な出来事がいつ始まり、いつ終わっているのか、考えましょう」(p.185)という「〈謎〉」を提示し、その「〈謎〉」に対する考えの例として5つ提示している。須貝が示す5つの考えは、どの人物の立場に立っているかによって異なることを示している。以下、少し長くはなるが、須貝千里(2023, pp.186-187)の「〈謎〉」についての説明箇所を引用する。

- ① 「専門の鉄砲打ち」が消えてしまうところから始まり、「専門の猟師」がやってくる直前で終わっている。
- ② 二疋の「白熊のような犬」が死んでしまうところから始まり、「そのときうしろからいきなり、(中略)あの白熊のような犬」が生き返って現れる直前で終わっている。
- ③ 「風がどうと吹いて」くるところから始まり、「風がどうと吹いて」くる直前で終わっている。
- ④ 「その時ふとうしろを見ますと、立派な一軒の西洋造りの家がある」というところで始まり、「室」が「けむりのように消え」る直前で終わっている。

こうした答えを想定することができますが、授業は混乱した事態の中に追い込まれていくでしょう。しかし、学習者にとって、こうした事態に直面させられていくことは意味のないことではありません。〈不思議なこと〉は世界がパラレルワールドであることに関わった事態だからです。

- ⑤ 「二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを云いながら、あるいて」いるところすでに始まっており、「一ぺん紙くづのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯にはいっても、もうもとのとおりにはお」らないというところでも終わっていない。

⑤の答えは、〈不思議なこと〉は「二人の若い紳士」が、狩猟服なのに「すっかりイギリスの兵隊のかたち」をしていること、「東京」に戻っても「紙くづのようになった二人の顔」が元に戻らないこと、

⁶ 「二人の紳士」はこの後どのような人生を歩むのだろうか。

- ・他者にこの出来事を話す…。聴いてくれる人が現れて、その他者とともに癒えていく。
- ・いつも通り過ごす日々。みんなからどうしたのその顔?と聞かれるが、何でもないよ、と答える。でも、毎朝鏡を見ると、くしゃくしゃの顔がそこに在る。その事実と向き合い続けながら生きていく。

発表者は、これまでの生きてきた経験から「影(シャドウ)」と統合することが、必要なのだと考えてきた。しかし、「影(シャドウ)」と統合されなくても、生き続けることができるのだという考えに至ることができた。きっと、「影(シャドウ)」と統合されなかったという体験が、本人にずっと語りかけ向き合い続けることへと導いてくれるからだろう。どの人にも生き続けることができるという希望は、生きることの可能性を広げてくれる。

語り手)によって語られているこうした出来事がそもそも〈不思議なこと〉であるということを前提にしています。このように「注文の多い料理店」の時間・空間・人間^{ジンカン}の構造を捉えることによって、「二人の若い紳士」が批評の対象として焦点化されていきます。「だいぶの山奥」から「専門の鉄砲打ち」(専門の猟師)「白熊のような犬」は排除されており、そこには姿を現すことができません。「二人の若い紳士」の「だいぶの山奥」(「山猫軒」)での恐怖の痕跡は「東京」に戻っても消え去ることはありません。「さっき一ぺん紙くづのようになった二人の顔」は、「東京に帰っても、お湯にはいっても、もうもとのとおりにはおお」りません。

〈語り手〉は、通常の日常の「客観的現実」空間の外部ということを前提にして、「二人の若い紳士」「山猫」たちの世界と「専門の鉄砲打ち」(専門の猟師)「白熊のような犬」の世界の、この二つの世界を俯瞰する地点から語っています。二つの世界は場面分けとして区分することはできません。場面分けは、通常の日常の「客観的現実」空間という世界観には対応してなされている限りにおいて、その外部に開かれて語られている事態に振り回されてしまいます。

西郷竹彦(2016)は、賢治作品に「二相」のあいだを「ゆれうごく」(p.107)状態を捉え、「虚実二相・明暗二相ゆらぎの世界」(p.110)と述べている。ここで述べられている「二相」とは、「二つだけの相」ということではない(p.111)とし、「両極端の二つの相の間に、無数の相がある」(p.111)と説明する。また、「相」は「現象」のことである(p.110)。つまり、「二相」とは、「両極端の二つの」「現象」を表した表現であり、「ゆれうごく」とは、その二つの現象の間を揺れ動くことで、無数の様々な現象が現れることを示しているのである。

さらに西郷竹彦(2016)は、「肝心なことは、二相のどの「組」が「実相」(真実の相)であるか、と考えてはならない」(p.111)と述べ、「視点のとりようで、また条件如何によって、その「相」はさまざまであり得る」(p.112)のだと説明する。

西郷竹彦が述べる「視点」とは、作品世界の〈虚構の人物〉の内、どの人物になって見ているかという読者の文学体験における立脚点を指す⁷。つまり、賢治作品は、様々な人物の立場から現象を捉える構造になっており、それによって作品世界に表れている現象が、様々に揺れ動いて表現されている、ということである。

以上の考えを、賢治作品だけでなく、すべての文学作品に共通する理論として構築したものが「相変移論」である。「相変移論」では、文学作品の構造を入子型で重層的であり、その構造内に役割を持った〈虚構の人物〉が設置されていると考える。そして、読者は、その作品構造の〈虚構の人物〉に瞬時に、または同時に、「相変移(変身)」しながら、様々な「視点」から物事を捉えて作品世界を想像していく、と考えるのである。(西郷竹彦、2008の内容を踏まえて発表者がまとめている。)

西郷竹彦が宮沢賢治の作品を基に「二相ゆらぎ」の考え方を導き出したのは、宮沢賢治作品が、様々な人物の立場から捉えられると共に、その捉え方がゆらぐ作品として、特徴的であったからだと思われる。

⁷ この考えの背景には、次のような考え方がある。〈作家〉が作品を創作する際に、〈虚構の人物〉をつくりだしその立場に立って(「視点」を創造し)文学作品を創作することで、「複合形象」が生まれる。つまり、文学作品は「複合形象」であるということ。(高橋茉由、2021aの研究内容を基に、上記のように説明している)

以上を踏まえると、須貝千里（2023）が、5つの考えを提示しているのは、「注文の多い料理店」が、様々な人物の立場から捉えられる構造を含んでいるからだと考える。さらに考えると、その捉えた内実が分け難く重なって読者体験として表れることから、①ともとれるし、②ともとれる。というように、5つのどの考えも妥当なものとして考えられるのだと言える。こういった構造を含んでいるため、「混乱した事態」（須貝千里，2023，p. 186）を招く可能性もあるのである。

（4）単元構想へとつなげる

では、以上の特徴や構造をもつ「注文の多い料理店」を、国語科の授業の教材として扱うことをどのように考えていけば良いのだろうか。以下に3つの観点を提示する。

〈対象人物〉も含めたすべての登場人物の立場に立つ

〈対象人物〉も含めたすべての登場人物の立場に立つという体験は、先述したように、田中実が実際に行っている読み方である。田中実は、それぞれの登場人物から捉えている世界を捉えるために、作品に設置されている視点とは別に、自らが登場人物の立場に立って、文学作品世界の初めから終わりまでを、新たに構築し直している。言うならば、登場人物の立場に立って文学作品世界を語り直すという営みをしていると推察される。このような営みをするのは、「3-2. (1)」で説明したように、文学作品の構造がそれぞれの登場人物から捉えられる世界が並立したものだからである。

西郷竹彦の「相変移論」より前の理論と比べるとわかりやすいが、西郷竹彦が構築した西郷文芸学では、文学作品に設置された「視点」に沿って読むことが基本とされていた。⁸高橋茉由（2018）において、西郷文芸学と第三項論の文学の読み方を比較整理したものがある。第三項論を踏まえた読み方によって、〈対象人物〉も含めたすべての登場人物の立場に立って想像することで、「視点人物」が捉えられていない部分が読者に見えてくる。それによって、視点人物の背景を創造して読むことができるのである。

以上のように、〈対象人物〉も含めたすべての登場人物の立場に立って創造して読んでいくことが必要である。しかし、学習者の実態から、学習者の興味関心や経験や価値観が異なることから、立場に立てる登場人物に偏りがあることがわかってきた。したがって、その偏りを生かして授業をデザインする必要がある。これは後に述べる、学習者が登場人物を選択して作品を創作する言語活動につながる。

それぞれの登場人物から捉えられる世界を並立させる

それぞれの登場人物から捉えられる世界を並立させる必要がある。田中実はそれを一人で行っているが、上記の学習者の実態において立場に立てる登場人物に偏りがあることから、それぞれの学習者が立場に立って構築した世界を、集めて全員で協力して統合する言語活動を設定すると良いと思われる。こ

⁸ 「異化」体験によって、読者（学習者）が自ら作品に設置された視点を外した読むことも、説明されてはいるが、理論としての統合が不十分であった。「相変移論」によって、読者の文学体験と文学作品構造をつなげ、理論の統合を図っている。しかし、「相変移論」を用いてどのように文学の授業を行うのかに関しては、西郷竹彦の説明が揺れており、「相変移論」が授業に生かす段階までには至っていなかったと思われる。

これは、「新たな語り手の立場」(＝「新たな聴者の立場」)の創造⁹を行う作業であり、田中実がしている読み方を体験的に行う仕掛けとして発表者がこれまでの研究を踏まえて考えたものである。

体験的に行う

「語り手はなぜそのように語っているのか」というように直接的に考えるのではなく、学習者が「新たな語り手の立場」(＝「新たな聴者の立場」)を創造するようにすることが大切だと考える。そうすることで、体験的にその場に立つことができる。そのための言語活動の工夫が必要である。直接的に考えると、頭のみで知的に考えることになり、体験的に学習者の自己を通して言語化することにならないと考える。発表者のこの考えは、「相変移論」が基になっている。

4. 「注文の多い料理店」の単元構想

4-1. 単元構想の枠組み

(1) 言語活動を通して国語力をつける

「深い学び＝文学を深く読んで国語力を発揮し、自覚する」には、学習者は経験・体験して(言語活動に取り組んで)それを言語化する必要がある。

【どの文学教材でも共通する流れ】

第0次：文学作品の世界に参加する環境設定

第1次：学習の計画をみんなで立てる

・「問い＝疑問＝なぞ」を生かす ・どんな言語活動を通してどんな国語力をつけるのか？

〈立場に立つ言語活動①〉

第2次：文学作品の大体を読む…あらすじ

〈立場に立つ言語活動② 個人〉

第3次：二次創作的な活動←個性を生かす…立場を立てる(虚構の人物)には差がある。

〈立場に立つ言語活動② みんなで〉

第4次：他者との二次創作作品の交流を踏まえて、学習者自身が文学作品世界を再構築する

・個性の交流を生かして作品を読み深める ・身に付けた国語力を捉える

○単元の活動目標は？…○○集をつくる、レポートを書く。

○単元の学習目標は？…3観点の内容。

(2) どんな言語活動にするか？—どのように評価するか？

第2次…「知識・技能」を身に付ける言語活動／ストーリーの表層(あらすじ)をおさえる活動

⁹ ここの概念の定義づけは、難しいところである。発表者のイメージとしては、田中実(2018)が提示した家の図のように、それぞれの登場人物の世界を並列したために、作られる新たな立場として、「新たな語り手の立場」(＝「新たな聴者の立場」)と述べている。また、これは学習の文脈のなかで、協同で作っていくものであると考えている。

学習指導要領の「構造と内容の把握」に対応している。

第3次…「思考力判断力表現力等」を身に付ける言語活動／個性を生かした特定の立場に立って二次創作する活動

学習指導要領の「精査・解釈」「考えの形成」「共有」に対応している。

第4次…「思考力判断力表現力等」を身に付ける言語活動／第3次で創作したものを交流・共有してもっと大きなものをつくる活動（例：レポート・論文を執筆する，〇〇集を作成する…ポートフォリオ的なもの）。←単元の学習過程を言語化する活動も入れ込むとよい。（例：編集後記をつける）
学習指導要領の「精査・解釈」「考えの形成」「共有」に対応している。

【評価について】

立った立場から話したり考えたりしたことが、表現できるような文章の種類（文学的文章が多い）。例えば、吹き出し、日記、物語、詩、漫画などが考えられる。

評価するポイントは、視点を創造して、気持ちや状況、できればさらに背景を、言葉にしているか？言葉にできていたら、想像できている、と考える。動作化の時は、動作の様子。これは、パフォーマンス課題・パフォーマンス評価と言われるものに当たる。ルーブリックをつけて評価することが適切であると考えられる。

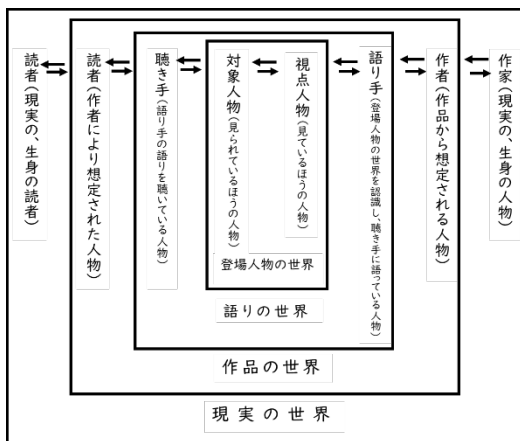
4-2. 単元の提案

	小学校・高学年	中学校	高校
0次	・他の賢治作品の読み聞かせを聞く	・他の賢治作品の読み聞かせを聞く ・賢治の生い立ちを知る	・序文を含めて童話集を読む（・賢治の生い立ちを知る）
1次	・初読の感想 ・学習計画を立てる	・初読の感想 ・学習計画を立てる	・初読の感想 ・学習計画を立てる
2次	動作化	動作化	動作化
3次	・登場人物を選択し、その登場人物の立場から詩をつくる ・謎について話し合う	・登場人物を選択し、その登場人物の立場からインタビューに答える動画を作成する ・謎について話し合う	・登場人物を選択し、その登場人物の立場から物語を創作し、それらを集めて物語集をつくる ・謎について話し合う（序文とのつながりは）
4次	・詩集をつくる ・編集後記	・インタビュー番組をつくる ・制作者インタビューに答える	・「注文の多い料理店」論文をつくる：作成した物語集と、「注文の多い料理店」の序文、童話集と繋げて物語集の解説を考える。

成人であれば、「二人の若い紳士」はこの後どのような人生を歩んだのかについて、お互いに聴きあう活動もおもしろいのではないだろうか。この言語活動の対象を成人にしたのは、人生経験を積んでいることで、「二人の若い紳士」のこの後の人生について語り合えるようになると考えたからである。

【補足資料：これまでの研究について】

筆者はこれまで、学習者一人ひとりの多様な読みを生かした文学の授業の在り方を研究してきた（一連の研究は、高橋, 2020a, 2020b, 2021a, 2021b, 2022, 2023 である）。まず基礎研究として、西郷竹彦の「相変移論」（西郷, 2008 他）の成立過程を解明したうえで（高橋, 2021a）、西郷竹彦の「相変移論」ならびに田中実の「第三項論」（田中, 2018 他）を用いた読みの過程を比較分析すること（高橋, 2021b）を通して、文学の作品構造と読者の文学体験とを統合したモデルを作成した。【図2】は、高橋（2021a, 2021b）を踏まえて、文学の作品構造と読者の文学体験を統合したモデルの図である（高橋, 2022 に掲載したものを再掲載している）。

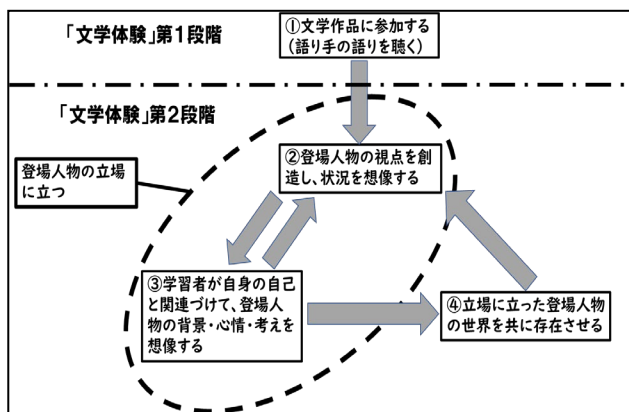


【図2】文学の作品構造と読者の文学体験モデル

先述した筆者の一連の研究を踏まえて、文学の作品構造と読者の文学体験の内実を改めて説明すると、次のようだと考える。文学の作品構造は、入子型で重層的な様相を呈している。さらに、その中に役割を持った人物が配置されており、それらの人物は「語り手—聴き手」「視点人物—対象人物」というように、コミュニケーション関係をもっている。

そして読者は文学を読む過程において、図1で示した作品内に存在する複数の人物（以下では、〈虚構の人物〉と述べる）の立場に立って¹⁰人物が何を見て何を感じているのかを想像している。

以上から明らかになったことを基に、小学校中学年の学習者を対象とした文学の「読むこと」の授業を3回行う中で、文学体験を軸とした文学の授業における学習の過程を構築し、学習過程に適する言語活動と教師の手だてを整理した（高橋, 2020a, 2020b, 2022, 2023）。これら3つの授業実践に関する研究から明らかになったことを修正し、新たに再構築したものが【図3】【表1】である。



【図3】文学体験を軸とした文学の授業における学習サイクル

【表1】の言語活動に漫画や詩を創作するといった文学的な文章を創作する活動が示されているのは、〈虚構の人物〉の立場に立つためには、立場を決めてその立場から語る二次創作的な活動が適しているからである。

さらに、『気のいい火山弾』の実践では、学習者の〈虚構の人物〉の立場に立つ内実について、学習者の自己との関連から、以下の2点を明らかにした。以下は、高橋（2023）で明らかにしたことを踏まえて、自己の内実が

¹⁰ 「立場に立つ」という言葉は、高橋（2021b）では西郷の相変移論を基に、「相変移する」という言葉を用いていた。しかし、高橋（2023）にて文学体験に対する考察を加えることを通して、「立場に立つ」という表現が相応しいと考え、「立場に立つ」を用いている。

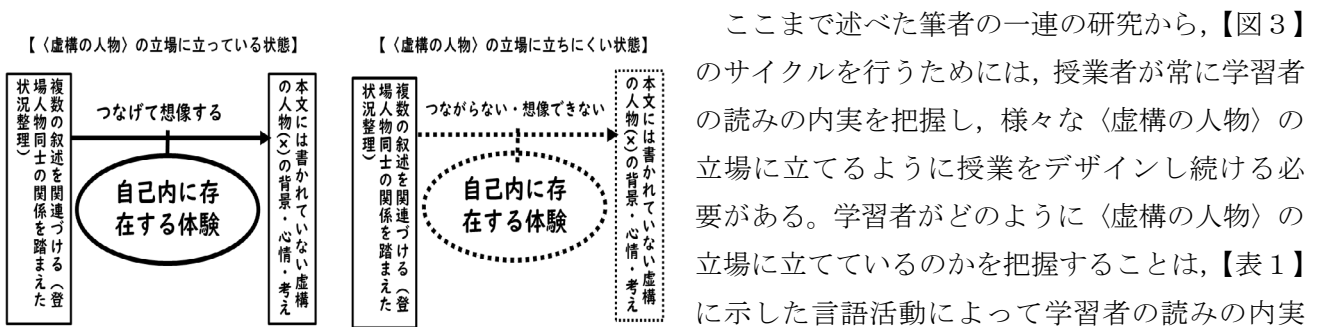
【表1】文学体験を軸とした授業における教師の手立てと言語活動

「文学体験」の過程	教師の手立て	言語活動
① 文学作品に参加する(語り手の語りを聴く)	作品に親しみをもたせるようにすること, 文学作品の世界を想像しやすいものにする	・詩の創作を何度も行う。 ・同じ作者の他の作品に慣れ親しむ(作品を教室に置く, 読み聞かせをする)。 ・作品に描かれる気象や物等について親しみをもつ。「水仙月の四日」の場合: 岩手県の台風や雪の性質について学ぶ。雪を扱った作品を読む。 ・これまで読んだ教材をもとに, 授業で行う言語活動をする(「白いぼうし」の場合: 「モチモチの木」や「三年峠」のまんがをかく)。
② 登場人物の視点や状況を想像する	立場に立ちやすい登場人物を選択して立場に立てるようにする。他の学習者がつくった作品を読むようにしたり, 読みを交流し合うようにしたりする。	・登場人物になりきって動作化をする。 ・詩を創作する時に, になりたい登場人物もしくは登場事物を選択する。 ・朗読劇の作成時に, 他の学習者の詩を読む。 ・まんがを創作する時, になりたい登場人物を選ぶ。 ・まんがが集の作成にあたり, 他の学習者のまんがを読む。 ・疑問について話し合う。
③ 学習者が自身の自己と関連づけて, 登場人物の背景・心情・考えを想像する	教材をもとに文学的な文章を創作する言語活動(二次創作)を設定する。話し合いによって納得解を見つけられるようにする。	・詩を創作する。 ・まんがを創作する。 ・話し合った内容を整理する。
④ 立場に立った登場人物の世界を共に存在させる	創った作品を集約できるようにする。話し合いによって納得解を見つけるようにする。	・つくった詩を集めて朗読劇をつくる。 ・疑問について話し合う。 ・つくったまんがを集めてまんが集をつくる。

わかるように, 筆者が新たに書き加えた内容である。

第一に, 学習者の自己内に存在する体験によって, 〈虚構の人物〉の立場に立ちやすい場合と, 立ちにくい場合とがある【図4】。学習者が「〈虚構の人物〉の立場に立っている状態」とは, 叙述を根拠として, 文学作品の本文には書かれていない〈虚構の人物〉の背景・心情・考えを学習者の自己内に存在する体験によってつなげて想像できている状態である。しかし, 学習者の自己内に存在する体験とつながらない場合は叙述から想像することが難しいため, 「〈虚構の人物〉の立場に立ちにくい状態」となる。

第二に, 学習の初期に〈虚構の人物〉の立場に立ちにくい場合でも, 【表1】に示した教師の手立てや言語活動を設定した学習を進めていくなかで, 叙述と学習者の自己内の奥に存在する体験とがつながると, 立場に立てるようになる。自己内の奥の領域が, 自己の無意識にあたりと考えられる。立場に立ちにくい状態から立てる状態になるためには, 学習者の無意識に存在する体験とつながることが重要であると考ええる。



【図4】〈虚構の人物〉の立場に立つ状態のちがひ (高橋, 2023 の内容をもとに筆者が作成した図)

ここまで述べた筆者の一連の研究から, 【図3】のサイクルを行うためには, 授業者が常に学習者の読みの内実を把握し, 様々な〈虚構の人物〉の立場に立てるように授業をデザインし続ける必要がある。学習者がどのように〈虚構の人物〉の立場に立っているのかを把握することは, 【表1】に示した言語活動によって学習者の読みの内実が表出されたものを元に推察することで可能となる。

【引用・参考文献】

アーシュラ・K. ル＝グウィン (著), ルース・ロビンス (イラスト), 清水 真砂子 (翻訳) (2009)『影との戦い: ゲド戦記 1』, 岩波書店
河合隼雄 (2013)「八 ル＝グウィン『影との戦い ゲド戦記 I』」河合隼雄著, 河合俊雄編『子どもと

- ファンタジー) コレクションⅡ ファンタジーを読む』岩波書店, 180-202
- 西郷竹彦 (1964) 「母のなかの“女” —わたしの文学開眼—」『子どもの本』実業之日本社, 31-40
- 西郷竹彦 (1988) 『西郷竹彦授業記録集④「注文の多い料理店」全記録』明治図書
- 西郷竹彦 (2008) 「文芸(虚構)の世界～西郷文芸学の新展開 その1～」文芸研編『文芸教育』87, 新読書社, 4-123
- 西郷竹彦 (2016) 『宮沢賢治「風の又三郎」現幻二相のゆらぎの世界』黎明書房
- 須貝千里 (2023) 「授業構想 「注文の多い料理店」の授業構想」田中実, 須貝千里, 難波博孝編『第三項理論が拓く文学研究／文学教育 小学校』明治図書, 182-196
- 高橋茉由 (2018) 「〈第三項〉理論と西郷文芸学」日本文学協会『日本文学』67号 12月号, 58-59
- 高橋茉由 (2020a) 「西郷文芸学「相変移」論を踏まえた授業—『水仙月の四日』を教材として—」日本文学協会『日本文学』69号 3月号, 2-15
- 高橋茉由 (2020b) 「文学の授業における「文学体験」の成立過程—「白いぼうし」の3こままんがをかかせる実践の分析を通して—」広島大学大学院人間社会科学研究科『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」』第1号, 353-362
- 高橋茉由 (2021a) 「西郷文芸学「相変移」論の成立過程」全国大学国語教育学会『国語科教育』第八十九集, 21-29
- 高橋茉由 (2021b) 「西郷文芸学「相変移」論と田中実「第三項」論—「羅生門」における読みの比較分析を通して—」国語教育思想研究会『国語教育思想研究』第22号, 31-36
- 高橋茉由 (2022) 「学習者の「文学体験」の過程—「気のいい火山弾」の実践考察を通して—」, 初等教育カリキュラム学会 第6回大会発表資料
- 高橋茉由 (2023) 「文学体験論を基にした文学教材を読むことの授業実践と学習者研究—学習者の「理由づけ」に着目した分析と考察—」秋田大学教育文化学部附属教職高度化センター『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』45巻, 37-49
- 田中実 (1997) 『読みのアナーキーを超えて』右文書院
- 田中実 (2018) 「〈近代小説〉の神髄は不条理, 概念おとしての〈第三項〉がこれを拓く—鴉外初期三部作を例にして—」, 日本文学協会編集, 『日本文学』第67巻 第8号, 2-17
- 田中実 (2023) 「作品研究 背理の輝き・「注文の多い料理店」論」田中実, 須貝千里, 難波博孝編『第三項理論が拓く文学研究／文学教育 小学校』明治図書, 166-181
- 渡邊皆仁 (2019) 「文学教材の全体構造: コミュニケーションモデルの一提案」『国語教育思想研究』19号 29-36